

橋下改革の政治経済学

増 田 和 夫

目次

はじめに

1. 橋下改革とはなにか
2. 橋下改革とネオリベリズム

はじめに

企業弁護士からテレビタレントを経て大阪府知事になった橋下徹は、現在、大阪府・市のダブル選挙（2012年3月）での勝利により、大阪市長の地位にある¹⁾。

ちまたの推測によれば、次期総選挙で国政に打って出るために、大阪維新塾を開いてその準備に余念がないといわれている。

本稿では、橋下改革が、いかなる理念を掲げてはじまり、その理念を実現する手法がどのようなものか、また、この理念と手法の間にある矛盾が、橋下改革の最終的着地点を解明する決定的な視点であることを明らかにしたい。

橋下改革のブレーンの中心人物である堺屋（2011）は、ここ20年間の日本の「下り坂」が、社会の荒廃や文化の衰退にまで至っていることが、この国を大改造しなければならない明確な理由だという。学力や学習意欲そのものの低下、自殺率の上昇など不安定で夢のない社会実勢をなんとか巻き戻すことが必要と主張している。

そのための体制改革が地方から起こらざるをえないとして、大阪の橋下改革にエールを送っている。

1. 橋下改革とは何か

どうして橋下改革（体制維新——大阪都）構想が求められたのか、この事情について、橋下徹のトップ・ブレーンとされる堺屋太一の主張を参考にしながらまとめてみた。

堺屋によれば、今日の日本が置かれた苦境は「第三の敗戦」と呼べるものだという。幕末期と太平洋戦争敗北を第一・第二の敗戦とみたとき、ここ20年来の長期不況からの出口もみつからずあえいでいる日本は、さしずめ第三の敗戦期にあたる。

これは何か具体的に、どこかの国に戦争で負けたという意味での敗戦（薩英戦争や大東亜戦争）という意味だけではなく、国の仕組み・システムが機能しなくなっていることや、社会の体質・倫理観・美意識までふくめて負けを意識したことを「敗戦」（自己コントロールを失っていること、あるいは自己アイデンティティーの喪失および崩壊）と呼んでいるようだ。

経済のみならず、文化・技術・社会・倫理の全般にわたるすべての面で「下り坂」とみなされる現象がふれていること、世のなかに活力がなく、変革への突破口も見いだせない現状をなんとかすべきだということなのである。たとえば税収をみても100兆円近い支出の半分も収入でまかなえないような実態について、このような状況は、1860年代の幕末期か敗戦時以外になかったことが強調される。

ようするに国の仕組みやシステム全般の破たんをさして「敗戦」と名付けているのである。このような評価に関しては異論もあるのだろう。

幕末期においては、封建社会を何とか維持したい人々と、それを壊して新しい国づくりをしようとする人々が衝突した。海外からみれば、山が海までせまり、農耕可能な平地が極端に少なく見える国土は、植民地にしても即座には利益のあがらない不良地に見えたために、列強の植民地政策の対象とはなるものではなかった。「最貧の孤立国」でしかなかったのである。

幕末までは、封建制度を維持するために、交通手段は徒歩が基本であり、立法行政も先例主義のお手盛り判断がまかりとおる。資本の蓄積も制約され、列強と比較しても、遅れた辺境地の貧しい未熟国とみなされたのである。

戦前の日本も半封建的な制度への固執が、経済成長と国民生活の向上を阻害していた社会であり、職業軍人と官僚の主導する、組織の維持と身分保障を最大の目的とした差別社会が、出口のない危機（戦争）へ国民を追いやっていった。敗戦によってはじめて、外から、社会の基本目標（憲法）と民主主義的な組織原則を強制注入することによって、世界市民の一員として経済成長していくベースを与えられたのである。

これを今日の問題としてみてみよう。

戦後の日本は陸海軍の解体によって、軍事費負担を限りなく軽減できたとともに、それら技術と技術者および戦時体制で培われた基礎的労働組織の民間転用をなしとげた。また財閥解体によって流動化した産業組織をリニューアルし、1970年代までに奇跡の復興をとげた。

これが高度成長と呼ばれたものであったが、その成功の核心部分には、戦時下の総力戦体制によって形成された、日本型の官僚制度（機構）がある。いわゆる「鉄のトライアングル」と呼ばれた政官業のもたれ合い体質も、官僚機構が政治家を誘導し、業界を指導するなかで形成されてきたものである。

これらの体制は、堺屋によれば、企業系列という産業の横並び体制、没個性型規格教育体制、東京一極集中（情報・文化・企業）の国土構造を形成させ、また、安全・平等・効率という理念を正義とする倫理観を生みだした。官僚主導と政治的・社会的協調体制、規格大量生産はワンセットで高度成長の成功の秘密となった。

この組合わせ（ワンセット）が戦後日本社会の仕組み（システム）とよべるものであったが、90年代に入り、情報化とそれに由来するグローバリゼーション、そして政治経済を連結するしくみが金融化するにおよんで、戦前の軍事・官僚体制が桎梏化したと同様に、社会発展の障害に転化

したのである。

鉄のトライアングルの改革が、人事の変更によっても政策の改革（政権交代）によっても不可能であった。堺屋によれば、仕組み・体制（システム）の変革のみが危機を解決する唯一の方法だ³⁾という。

たとえば、NTTの民営化は、政権交代可能な政治体制や、官僚機構改革（郵政省を解体して総務省において情報通信の総合的な

政策立案を行う）、およびIT革命をキーとした産業構造の改変という、政官業の新しいネットワーク構造を前提としてのみ可能となったのである。NTTの解体という情報通信インフラの民営化戦略が、総合的に見て正しかったのか、または成功したのかという評価はここで下すことはできないが、改革そのものが、体制・仕組み（システム）の改革としてのみ可能となったという視点が、堺屋の見解の独自で学ぶべき点であると思う。

ここで一点注意したいことがある。

堺屋は体制（システム）の改革と同時に、新しい倫理（気質・心情）が必要であるといっている点である⁴⁾。

「国のきもち（倫理）とかたち（構造）」ということ、堺屋〔第三〕のなかで主張し、国の「かたち（構造）」の基本には、その国がめざすべき「きもち（倫理）」が明確であらねばならない。と述べている。めざすべききもち（倫理）というのは何のことだろうか。

「つまり、これからの改革には根本の体制と体質気質を変えていくような改革が必要となるのである。」堺屋（2004）

以下の図1表2は、堺屋（2004）から筆者＝増田）がまとめたものである。仕方・仕掛けというのは、先に見た人事や政策ととらえることができよう。仕組みの部分は、表1で構造改革やリストラクチャリングとされているが、行財政改革や教育改革、社会保障改革などは、それ単体で見ればリストラクチャリングであるが、システムの変革という場合は、どちらかといえば、リエンジニアリングに近いとも思える。

リストラクチャリングとリエンジニアリングの相違は、ここでは、部分最適と全体最適の相違と考えていただきたい。リストラクチャリングにおいては、おもに組織が単にスリムになるということであるのに対して、リエンジニアリングでは、組織のスリム化が、組織外との関係もふくめて、組織内の質的な組み換え（連結の変更）が生じるということである。日本のこれまでの構造改革は、この全体最適に至らなかったという意味で失敗していると評価されるだろう。

問題は、この仕組みや制度（システム）の改革の上位に、体質・気質（図1）や、パラダイム（根本的な改革、思想の転換）というものがある点である。先にみた、国のきもち（倫理）というものがこれにあたるのだろうか。

堺屋が、第三の敗戦と呼ぶ限りにおいては、レジーム（体制）の変更は、この体質・気質やパラダイム（倫理観）の変更なしには不可能なはずである。

上記、表3においては精神とされているが、来るべきこの部分をどのように想定するかが、い

表1 平成改革（バブル崩壊・冷戦構造解体）

◆人→1994年 細川内閣
◆仕方→橋本6大改革
◆仕掛け→行政改革・財政再建・消費税
◆仕組み→小渕内閣：金融再生・中小企業対策・需要 拡大策・会社法改正・雇用政策の転換
↓
構造改革：この延長線上
★改革後の「見取り図」がない。

図 1

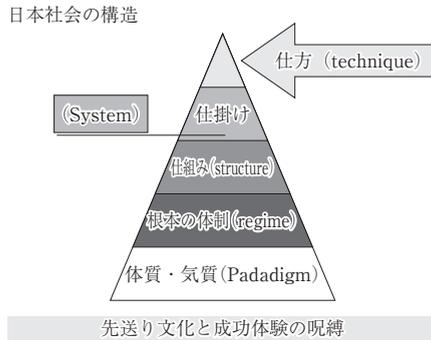


表 2

↑	パラダイム	根本的な改革。思想の転換 組織のコンセプトを改革
		本物の時代の変化
	仕 組 み	構造改革。リストラクチャリ ング非採算事業からの撤退。 事業再編。系列企業の見直し。
	仕 掛 け	生産方法を改める。代理店制 度の変更。雇用制度の変更。 リエンジニアリング
	仕 方	製造や販売の方法、宣伝文句 や店員の態度
	業績悪化→赤字→人事をいじる	

表 3

	徳川体制	明治以降	戦後日本
正義	安定と様式	勤勉忠勇	効率・平等安全
体制	封建主義的自給経済	官僚啓蒙軍官主導	官僚主義・業界協 調・日米同盟
精神	鎖国伝統	欧米模倣国粹主義	職縁社会・画一教 育・使い捨て

表3) 堺屋 [2003] より作成。

わゆる「思想」や「理念」の問題ということなのであろう。

堺屋は、橋下徹を、幕末の怪人、高杉晋作になぞらえている。明治維新时期における最大の制度変更としての版籍奉還（武士身分の廃止）が、実はその先行例（長州藩の奇兵隊）があったことよってスムーズに成し遂げられたと主張する。長州藩の上級藩士の子息であった高杉晋作は、吉田松陰の薫陶をうけ、長州藩内に奇兵隊（士族のみの正規軍と区別）を組織した。西洋式の軍隊組織や銃・砲兵隊を組織した点も重要である。身分にとらわれない正規の（民兵ではない）軍隊組織が、幕藩体制のもとで成立したことの意義は大きいといえよう。とりわけ瞠目すべきなのは、被

差別部落民をも入隊させている点である。

やる気のない武士よりも、志のある農民や部落民がはるかに役に立つと考えていたようである。「身分を選ばぬ有志の部隊」であり、「身分を選ばず力量を重んじる」という取り組みが支持され、奇兵隊は3000人をこえる大部隊に成長したという。

「高杉晋作によって作られた奇兵隊という組織が、徳川幕藩体制の根幹をなした『ねらい』である『安定と秩序』を象徴する『仕組み』、非武装安定社会の基本概念に反した、新しい社会理念を提起する組織原理と行動力をもっていた。」堺屋（1988）p. 67。

徳川幕府を倒すためには、自分たちも立脚している武家社会をも否定するという長州藩の行動は、少し狂気じみてはいる。しかし武士階級は農民や部落民の協力なしには、自らをも武士という身分から解放できなかった、という真実は重大なものであろう。

倒幕という事実と武士の解放（身分社会の解消）という真実の距離がいかにか遠くはなれたものであったにせよ、幕末の動乱が、階級闘争という歴史の必然を実証し推し進めていたということを評価すべきだと思う。しかし堺屋は、明治維新を高くは評価していない。

「明治維新には来るべき社会について一貫した信念を持った指導者もいなければ、卓抜した組織者もいなかったし、『信念と正義感に燃えた戦闘的で統一のとれた革命組織』といえるようなものはなかった。」「明治維新は、さして偉大でもない人々のまとまりの悪い集団が、なんとなく世の流れに乗って成功した『奇形の革命』といえる。明治維新について語るとき、何よりも難しいのは——特に外国人に語る場合——この『超法規的大変革』には主役も主導集団もないという点である。」堺屋（1988）p. 66-67。

社会のねらい（組織形成の目標）と仕組み（目標達成のための体制制度）を根本的に変えたとされる明治維新がどのような背景をもって成立したのか、堺屋はつづけて、長州藩の財政破たんから、その必然的帰結を導いてみせている。

関ヶ原の戦いで敗軍となり、山口の萩に300年近くも蟄居させられた毛利家の妄動を貫き、流通経済の発展や、手工業の展開が、江戸幕藩体制の被抑圧勢力（外様）をして、封建的支配関係の解体へむけさせたのである。

幕末期に財政危機で破たん寸前であった長州藩と、現在の大阪に共通点をみだしているのが、ほかならぬ堺屋太一なのである。当時の長州藩も、抜本的な改革以外に立ち行かない現状にあったように、今日の大阪の現状もあるというのが堺屋の評価なのである。

これは本当であろうか。

堺屋（2011）は、関西経済の伸び悩み、若者の流出、企業の本社機能の流出、文化活動の衰退、生活の安直化、学力低下や犯罪発生率の増加など、大阪が抱える諸問題を、大阪の体制問題（システム）として提起している。

「大阪という大都市を基礎自治体の大阪市が運営したため、全国的視野も国際的交わりももたなかったのです。大阪市長選挙では『ゴミ集めの分別の是非』や『放置自転車の問題』が争点でした。世界の文明が転換する大事な時期に、きわめて内向きな政治に終始し、国際的な時代の潮流に乗り遅れたのです。」

バスに乗り遅れるな！ 橋下徹のあとにつづけ！

これが堺屋の結論のようだが、何か重大な問題が欠落しているように思えてならない。

先に、堺屋が高杉晋作と橋下徹を同一視していると述べたが、産経 Web ニュースの The リーダーで「橋下市長は平清盛や織田信長の性格を備えている」と褒めあげていることにも驚かされる。

「歴史に出てくる改革者。平清盛や織田信長の性格を備えた人です。大事なのは、はっきりとした思想を持っていること。ここを飛ばすと、お騒がせ屋になってしまう」

本当に橋下徹に「思想」なるものがあるのだろうか。どうも橋下を、高杉晋作のような「はねかえり者（お騒がせ屋）」とみている節もある。

「理念を持っている政治家だよ、と。信長は封建社会から近世社会に、清盛は貴族から武士の社会に、それぞれ理念を持っていた。橋下さんもそういう人。現実に行おうとしていることは、消費者主権の倫理に基づいて、大阪都という体制改革をやり、事業を黒字成長型にするという、この3つ。これを極めて頑固にやっている。この頑固さ、倫理への忠実さが一番大事」

ここで、堺屋のいう、理念＝倫理＝ねらい＝パラダイム＝思想が、大阪維新の場合、供給者主導から消費者主権への移行であることが明らかにされている。

堺屋氏は、産経新聞2月26日号でインタビューに答えて、次のように言う。

「理念を持っている政治家だよ、と。信長は封建社会から近世社会に、清盛は貴族から武士の社会に、それぞれ理念を持っていた。橋下さんもそういう人。現実に行おうとしていることは、消費者主権の倫理に基づいて、大阪都という体制改革をやり、事業を黒字成長型にするという、この3つ。これを極めて頑固にやっている。この頑固さ、倫理への忠実さが一番大事」

(<http://sankei.jp.msn.com/politics/news/120226/lc12022622360002-n1.htm>)

おそらく堺屋のいうところの消費者主権は、21世紀に入って本格化した、ネットワークベースでの評判社会やソーシャルという迂遠な理想まで含みこんでいるのだろうか、はたして橋下徹はそのような理念や思想を本当に持ち合わせているのだろうか。日頃の発言を聞くにつけ、ますます疑いが生じてきていうのは私だけではあるまい。

消費者主権の倫理に基づいて大阪都という体制改革を遂行して、事業を黒字成長型にするという基本構想（ビジョン）に置き、大阪市・大阪府の二重行政の解消や教育への消費者主権の市場原理を導入するなどの（ミッション）を実現することが、橋下維新の維新（革命）たるゆえんであるとされている。

橋下はこのビジョンを、パソコンやゲーム機の OS（ハード）にたとえ、この OS の革新（イノベーション）なしには、ビジョン（ソフト）の実現はあり得ないというのである。なかなかわかりやすいたとえではある。

この OS もソフトであり、どうもソフトとハードの関連を正確には把握していないという問題点をとりあえず置いておくとしても、この OS の基本思想について、消費者主権なるものを持ち出してきたことが問題の核心を構成しているということである。

どういうことかという、本来、主権というものは、憲法に関わる議論をみても、それが国民のもとにあるのか、それとも無いのかという点から議論されてきたものである。これを、国民という政治的な主体や、市民という社会的な主体の問題としてではなく、「消費者」という経済的な主体に限定された問題として、課題を絞り込んでいるところが重要なのである。

国民や市民、あるいは住民自治ではなく、どうして「消費者主権」なのか、そのあたりをきち

んと説明すべきなのである。堺屋〔2004〕は次のように説明している。

「80年代半ばくらいになって、モノが豊かであれば人間は本当に幸せなんだろうかという疑問が、まずアメリカ、イギリスで起こってきました。……人間の幸せというのは、モノが多いということではなく、満足が大きいということではないか、という疑問が出て来た。モノが多いというのは客観的ですが、満足の大きさというのは主観的です。価値観が大きく変わり、それまでの規格大量生産型の社会は、必ずしも人に幸せをもたらす社会ではなくなったのです。」堺屋(2011) p. 38。

ここで堺屋がいわんとするところは、分からなくもないのだが、個人の満足度を指標とする社会というのが、21世紀の特徴となるといわれると、経済学の常識からかなりズレるとも感じる。古典派の労働価値説が、新古典派の主観価値説に大きく転換するのは、19世紀の後半70年代であり、21世紀ではないのである。効用という形で、主観的な価値を問題としたのは19世紀の終りである。

この新古典派の考え方を、さらに純化して、物事のすべての判断に経済的な価値の優劣をもちこんだのが、ネオリベラリズム（新自由主義）の考え方であった。堺屋の考え方が、即座に、ネオリベラリズムに行き着くというようには思わないが、彼の発想が、政治家によって振り回されるときに、その転回は顕著となるように思える。

堺屋は、「消費者主権」の考え方をさらに説明し、それは「ニア・イズ・ベター」という思想に行き着くことを紹介している。

「身近なところで決めた方がよい。自分のお金を使う人は他人のお金を使う人より賢いということです。従って、まず個人のお金を増やそう。その次には市町村、身近な基礎自治体の権限とカネを増やそう。その次には広域自治体のカネを増やそう。そして最後が国のカネだろう。この思想が、行財政改革の基本になって、いまでは世界中が都市間競争に向かっています。」(2011) 堺屋 p. 39。

もっとも身近でミクロな地点での決定（システム）と決定力を強化しようという思想であり、まったくそのとおりといえる。思想も見識も実行力もある堺屋太一が、日本の総理になれなかったことに最大の問題があるようだが、だからといって橋下徹が、堺屋の思想をそのまま素直に実践してくれるという保証はどこにもないのではないか。

以下では、ネオリベラリズムの基本的な考え方と、橋下改革の共通性についてみることによって、橋下改革の本質を、ネオリベラリズムの視点から見ることにしたい。

2. 橋下改革とネオリベラリズム

以下、9点にわたって、デヴィット・ハーベイ（2007）がいうネオリベラリズムの指標をベースとして、橋下改革のネオリベラリズム度をチェックしていく。おどろくべきほど、このリベラリズムの指標に、橋下改革が一致することを確認していただきたいと思う。

①ネオリベラリズム国家の基本使命

ビジネスに好適な環境の形成

（雇用や社会的福祉への影響は二の次にして資本蓄積の条件を最適化すること）ハーベイ（2007）28ページ。

この基本使命から見て、橋下維新の主張する、地域分権や道州制、はたまた大阪都構想などどのように見えるであろうか。地域分権や道州制や大阪都構想が、大手ゼネコンなどの開発政策を押し進めるテコとなることは、財界が執拗にこれらの政策の実行をせまっていることでも明らかである⁵⁾。

橋下市長が「スピード」感を売りにしているのも、この要件にあてはまるのではないか。

「ネオリベラル国家は企業利益の全側面を支援し促進するよう取りはからうが（優遇税制などの措置や、必要ならば国家負担によるインフラの整備などによって）、その根拠としてこうした施策が成長と革新をうながし、長い目で見れば貧困を根絶し、人口の大多数の生活水準を向上させる唯一の方策である」ハーベイ（2007）28ページ。

② 民営化

資本蓄積のための新たな市場開拓の手段としての共有財産の民営化
ハーベイ（2007）29ページ。

橋下維新においても、市営地下鉄やなどの民営化政策がもっとも重要なものとして取り上げられている。

大阪府知事時代においても、バイエリア開発や箕面森町開発など、大規模事業に熱をあげたことをみても、橋下改革の本質が、公有財産の叩売りにあることをよく見ておく必要があるだろう。

③ 敵の生産

国内でネオリベラル国家は資本蓄積を制限しようとするあらゆる形態の社会的連帯に敵対する。
ハーベイ（2007）29ページ。

「社会民主主義国家でかなりの力を獲得してきた労働組合などの社会運動に」敵対し、「ときにはあからさまな弾圧を行う」ハーベイ（2007）28ページ。

橋下維新においては、労働組合や地域の自治組織に対する執拗な攻撃が目につく。民主的な知識人に対する激しい攻撃もここに由来していると考えたと納得のいくものである。

そのような攻撃がいかなる理由によって行われているのかをしっかりと見ておく必要があるのだろう。

④ 社会福祉事業からの撤退

社会民主主義国家の運営では中核となってきた医療、公教育、公益事業などの分野における国家の役割の出来うるかぎりの縮小がめざされる。
社会的セーフティーネットの切り詰め。ハーベイ（2007）29ページ。

橋下維新のもとでは、市民病院と府立病院の統合、私立・府立学校の統合、水道事業の統合などが画策されている。これらが二重行政の解消という、もっともらしい理由をつけて遂行されようとしている。

大阪府知事時代におこった、府民のセーフティーネットの破壊が、いつもの財政破たんを煽ることで世論喚起され、いかなる理由によって遂行されてきたのかをしっかりと理解することが重要である。

⑤ 官僚的規制の増大

民営化できない公共部門の「資金管理責任（アカウントビリティー）」や「コスト効果」を監視する規則の増大。ハーベイ（2007）28ページ。

公金利用の監査が異常な厳格さをもって行われていることの本当の理由をはっきりしておく必要

があるだろう。

橋下市長は生活保護天国の汚名を返上することが大阪都構想を実現する絶対条件だというのが、これを遂行するためのGメン調査などは熾烈をきわめているといわれる。なぜそこまでして徹底調査にこだわるのか。このあたりをしっかりと見ておく必要があるだろう。

⑥企業のための公共政策

企業の利害関心にしがたって彼らが有利になる法が作られる。
ハーベイ（2007）30ページ。

大阪の解体については、自治体問題研究所（2011）にくわしい。

「今回の見直し事業41のうち24事業が他府県が行っていないことが理由です。したがって、これまで大阪府が独自に積み上げてきた生活に関わる多くの事業が廃止されていき、他府県と横並びの水準とされていきます。……この3年間の財政再建に関わる歳出がカットされ、他方でWTCへの経費を確保し、大型プロジェクトに踏み込まずに維持されていることも理解できます。つまり財政再建によって生活関連経費を最低限にまで落とし込んで、それらを市町村に押し付け、財源を生みだし、それによって大型プロジェクトによる産業政策を展開することです。

救急救命医療や学校の安全対策、府営住宅や府民文化を破壊して、ベイエリア開発、カジノ誘致、シャープへの補助金、箕面森町などの赤字開発へ向かった。」p.54-55。

また、橋下市長、経産幹部と密会。2月 大飯再稼働で意見交換。民主幹部同席ということが報じられている。⁶⁾

「橋下市長が会ったのは経済産業省資源エネルギー庁次長の今井尚哉氏です。上京中の2月21日朝、東京・虎ノ門のホテル・オークラの和風かっぱうで面談しました。今井次長は、原発再稼働が必要だと判断した政府の4大臣（野田首相、藤村官房長官、枝野経済産業相、細野原発担当相）会合に経済産業省事務当局を代表する資格で陪席しています。

電力業界関係者によると、橋下市長と今井次長は関西電力大飯（おおい）原発3，4号機の再稼働をめぐる意見交換しました。同日の会合には、原発再稼働に積極的な民主党の政策担当幹部が同席していました。橋下氏は上京の折、この民主党幹部と隠密裏にしばしば会っている事実が確認されています。」

⑦弾圧的な法制と政策

必要ならば国家は弾圧的な法制と政策に訴え、抵抗勢力を蹴散らすことも辞さないし、監視・警察活動も蔓延する。ハーベイ（2007）30ページ。

教職員条例などが典型といえよう。

⑧エリート支配

反民主主義的で、一部のエリートによる支配が好まれ、上からの命令と司法判断による政府が最良のものとなされ、かつての民主的に選ばれた議会による決定プロセスは嫌われるハーベイ（2007）31ページ。

大阪市の特別顧問（橋下のブレン）の多さにはおどろくばかりである。⁷⁾

議会による積み上げられた議論ではなく、ブレン政治を行っていることの本当の理由をしっかりとみえておく必要があるだろう。

⑨規制される側が規制をつくるパラドックス

公的な決定過程がますます不透明になる。

ハーベイ（2007）31ページ。

山田宏 大阪市特別顧問（前杉並区長）の次の発言にはっきり問題が現れている。⁸⁾

「橋下氏は、大阪だけでなく、日本の政策決定のシステムを変えようとしている。何も変えられない政治から『決断して、変える政治』への大転換を目指している。杉並区長時代から、橋下氏とは『首長連合』のタッグを組んで意見交換してきたが、その仕事のやり方はすさまじい。まさに、『平成の織田信長』といえる人物だ」

「自民党から民主党に政権交代したが、何も変わらない。悪くなっている部分もある。国民は『変わってほしい』と投票したのに、民意がまったく反映されていない。世界が大きく変わるなかで、このままでは日本だけが取り残されてしまう。日本の統治機構の仕組みを変えて、政策が実現できるシステムに変える必要がある」と橋下氏は考えている」

日本の政策決定のシステムを変えると述べているが、とりあえず現在は、地方自治体の首長であるはずであり、現行の法律にしたがって、地域住民のために寸暇を惜しんで働かなくてはならないのではないか。まさに規制されるべき側が、規則をつくろうとしているのだ。

⑩権威主義、新保守主義による補完
ハーベイ33ページ。

君が代斉唱の強制や、憲法改正発言、および徴兵制についての検討を私塾である維新塾ではじめるなど、きなくさい発言はすべてこの項目に属するものである。

さらに橋下問題は、独裁問題、ハシズム（ファシズム）問題など多くの論点が残されているが、橋下徹の体質は、そのネオリベラリズム体質が主要なものとして結論づけてよいものと結論する。

注

- 1) 橋下徹は、企業弁護士をへて、大阪府知事になり、その後現職。
- 2) 堺屋太一元経済企画庁長官。通産官僚として大阪万博を企画、その後著述業に転じ、現在大阪府・市合同本部特別顧問。著作については、巻末参考文献を参照。
- 3) 堺屋は、国鉄改革が民営化という方法でシステムの変更を行ったことを評価している。ただ、このシステムの変更が「民営化」のみで成し遂げられたというのは言い過ぎではなからうかと思う。当時、国鉄改革を実行した中曽根内閣は、行財政改革をはじめとして、総合的な新自由主義的改革のなかで、国鉄改革を遂行したのであり、その総合性のなかに、改革の本質をみる必要があるかと思う。
- 4) 同様な対比として、堺屋（2005）で、タイヤ（体質）とチューブ（気質）の関連、姿勢と動作、仕方 p. 112. などと表現されている。
- 5) 道州制については大前（2004）が論じていたものである。
「道州を21世紀のボーダレス社会における『繁栄の単位』=『地域国家』にすること」 p. 220。この地域国家が道州。
「カネ、企業、技術、情報、優秀な人材を世界中から呼び込むこと、すなわち自分の原資ではなく他人の原資を有効に利用することが、新たな繁栄の方程式になった。」 p. 221。
「日本は中央集権で、国全体で1つの答えを追い求めている。しかし、今の日本の中には複数の答えがあり、かつ地域によって事情が違う。したがって富を生み出すためには、それぞれの地域が世界中から富を呼び込まなければならない。」 p. 222。
- 6) 2012年5月1日（火）http://www.jcp.or.jp/akahata/aik12/2012-05-01/2012050101_03_1.html
- 7) 上山信一 元官僚の大学教授。

- 古賀茂明 元官僚。
 堺屋太一 元官僚，民業経験20余年。作家・評論家。
 原英史 官僚～民業2年～大学教授。
 橋爪紳也 ずっと大学人。
 飯田哲也 NPOや大学の研究員。
 余語邦彦 元官僚。公費留学6年後，外資に入社w 以後民間。
 安藤忠雄 建築家を経てここ25年ほど大学教授。
 山田宏 松下政経塾を経てずっと政界。
 金井利之 大学人。
 佐々木信夫 都庁勤務～大学教授。
 土居丈朗 大学人。
 赤井伸郎 大学人。
 山中俊之 元官僚。一時民間（13年）。大学教授。
 稲継裕昭 大阪市勤務～大学教授。
 中田宏 松下政経塾を経てずっと政界。元横浜市長。w
 高橋洋一 もと官僚。大学教授鈴木亘 日銀～大学教授。
 橋下がフォローしているネットのプレーン。
 古川元久（1000万人移民受け入れ）土居丈朗 高橋洋一 池田信夫 駒崎弘樹（慶応卒） 茂木健一郎（慶応教授） 古賀茂明 竹中平蔵（慶応教授） 堀江貴文 田原総一郎 孫正義上山信一（慶応教授） わたなべ美樹（ワタミ）

8) <http://www.zakzak.co.jp/society/politics/news/20120222/plt1202221811005-n1.htm>

参考文献

- (1967) 池口小太郎『日本の地域構造地域開発と楕円構造の再建』（東洋経済新報社，1967年）
 (1988) 堺屋太一責任編集『日本を創った戦略集団⑤——維新の知識と情熱』集英社。(1989) 大前研一『平成維新』講談社。
 (1992) 大前研一『平成維新 part2』講談社。
 (1993) 大前研一『新・大前研一レポート』。
 (1995) 大前研一『地域国家論』。
 (1995) 大前研一「新・薩長連合結成宣言『文藝春秋』3月号。
 (1996) 大前研一「今、なぜふたたび『道州制』か」『文藝春秋』3月号。
 (1998) 大前研一『大前研一のガラガラポン』フォレスト出版。
 (2001) 堺屋太一『堺屋レポート1997-2001』朝日文庫。
 (2003) 堺屋太一『東大講義録——文明を解く——』講談社。
 (2004) 大前研一『日本の真実』小学館。
 (2004) 堺屋太一『「平成30年」への警告』朝日文庫。
 (2005) 吉富有司『大阪破産』光文社。
 (2005) 堺屋太一『団塊の世代「黄金の10年」が始まる』文藝春秋。
 (2007) ハーヴェイ『ネオリベラリズムとは何か』青土社
 (2007) 檜村愛子『ネオリベラリズムの精神分析』光文社新書。
 (2008) 金子勝・高橋正幸『地域切り捨て 生きていけない現実』岩波書店。
 (2008) 堺屋太一『対話 芸術のある国とくらし』実業之日本社。
 (2009) 大前研一『最強国家ニッポンの設計図』小学館
 (2009) 吉富有司『大阪破産 第2章——貧困都市への転落』光文社。
 (2009) 産経新聞大阪社会部『橋下徹研究』

- (2009) 堺屋太一『凄い時代 勝負は2011年』講談社。
- (2010) 上山信一『大阪維新 橋下改革が日本を変える』角川 SSC 新書。
- (2011) 内田樹・香山リカ・山口二郎・薬師院仁志『橋下主義（ハシズム）を許すな！』ビ
- (2011) 橋下徹・堺屋太一『体制維新——大阪都』文春新書。
- (2011) 吉富有司『橋下徹 改革者が壊し屋か——大阪都構想のゆくえ』中公新書ラクレ。
- (2011) 大阪の地方自治を考える会『「仮面の騎士」橋下徹』講談社。
- (2011) 大阪自治体問題研究所『「大阪維新」改革を問う——住民のいのち・くらしを守る自治体の役割』
- (2012) 二宮厚美『新自由主義からの脱出——グローバル化の中の新自由主義 vs. 新福祉国家』新出版社。
- (2012) 第三書館編集部『ハシズム——橋下維新を「当選会見」から読み解く』第三書館。
- (2012) 山本健治『橋下徹ハシズム論——とんでもない、とほうもない、とてつもない』第三書館。
- (2012) 中野剛志・三橋貴明『売国奴に告ぐ！——いま日本に迫る危機の正体』徳間書店。
- 「おわりに 売国奴の正体」中野剛志、において、
- (2012) 福岡政行『大阪維新で日本は変わる！？』ベスト新書。
- (2012) 大阪維新の会『日本再生のためのグレートリセット——維新政治塾レジュメ』 3月10日
(VER1.01)。
- (2012) 一ノ宮美成+グループ・K21『橋下「大阪維新」の嘘』宝島社。
- (2012) 産経新聞大阪社会部『橋下語録』産経新聞出版。
- (2012) 「橋下政治の本質——大攻勢を仕掛ける大阪維新の会『週刊ダイヤモンド』4月7日号。
- (2012) 大前研一『「全国一律に」から決別するとき——大阪をピカピカに磨けば、日本が変わる』総力特
集「橋下徹に日本の改革を委ねよ！『Voice』5月号。
- (2012) 山田宏『彼の政治手法は『独裁』とは対極だ——大阪ではなぜ改革がスピーディ
- (2012) 宮崎哲弥・萱野稔人・飯田泰之『「小泉改革」第二幕の幕開けか——政治手法から政策集『維新八
策』まで、気鋭の論客が徹底討論』総力特集「橋下徹に日本の改革を委ねよ！『Voice』5月号。
- (2012) 斎藤環『「浪速のヤンキー好き」はいつまで続くか——『無害化された悪』の要素を活用したキャ
ラ立て戦略の命運』特集「大阪維新の真価を問う」『Voice』1月号。
- (2012) 湯浅誠『社会運動の立ち位置——議会制民主主義の危機において』『世界』3月号。
- 強いリーダーシップ論